

## インサイド・ジョブ



百田 陽一

思い出ばかりでは、芸がないので近況の一端を述べさせてもらいます。横浜にきてからは二回映画を観にでかけました。二回とも新宿へでかけました。そこでしか上映してないためです。

一回目は米陸軍の日系人だけで編成したいわゆる二世部隊のドキュメント「442日系部隊アメリカ史上最強の陸軍」。すずき・じゅんいち監督によるこのドキュメントは感動的でした。二点だけ触れますと、すごいスピードで進撃する二世部隊がローマに一番乗りする寸前で、なぜかローマを迂回するように命

じられます。欧米人にとってローマ帝国の中心地だったこの地にアジア系の部隊が一番乗りするのは、耐え難いことだったのでしよう。もうひとつは、ドイツ南部に進んだ二世部隊は、ダッハウ強制収容所を解放し、ガス室送り寸前のユダヤ人を少なくとも一〇〇人以上救いました。この事実も一九九二年まで公になりませんでした。

もう一つの映画は今日、五月二十八日に観てきたばかりの「インサイド・ジョブ」です。週刊朝日に森永卓郎が紹介していたので知ったのですが、とにかく一切の虚飾を排し、インタビューに次ぐインタビューで構成されたドキュメントでした。監督はチャールズ・フアーガソンで、第八十三回アカデミー賞長編ドキュメンタリー賞受賞作品です。要するに世界に吹き荒れたリーマン・ショックは政府を中心とするウォールストリートを中心とする

金融界、そしてハーバード、コロンビアというアメリカでも超一流の学問の府の学者連中が結託したグルになったほとんど犯罪に近い詐欺事件だと断じています。

しかし、学者連中は絶対に自らの非を認めようとはしません。口を開けば、「アブソリュートトリイ ノー」なのです。学者としての良心などそんなナイーブな感情が通用する世界ではない、感じます。それでも数か所、答えに詰まるシーンもありました。80年代以降急速に製造業が凋落し、金融工学に活路を見出したアメリカ。「技術者は橋などを造るが、金融工学の技術者は夢を造る。ただ、それがいい夢ではなく、*nightmare*（悪夢）だった」というセリフが印象的でした。いずれにしても関係者全員が日本のソロバンでは考えられない超高額の金を堂々とつかんでしばし退場するだけです。

おもしろかったのは、下半身のスキヤンダルで辞任したIMFのストロスカーン専務理事、そしてその後任として有力視されているフランスのラガルド・経済・財政・産業相が頻繁に登場することです。

FRBのグリーンズパン、バーナンキそしてポールソン、ガイトナーと続く財務長官。何か手を打つべきだと指摘されながら、だれも結果として何もしてませんでした。オバマ大統領はイスラエルに対して一九六七年の線まで戻るべきだと中東和平で踏み込んだ感があります。このドキュメントでは、オバマ政権は、ウォール街にバックアップされて誕生した政権なので、これからも何もかえられないだろうと突き放しています。

こういった現状の中で、我が国はどんな財政、金融政策でこの巨人と向き合うのでしょうか。とても菅政権にこれを持ち切る力はな

く、暗澹たる気持ちになります。現関係の一人、与謝野馨が奥さんと思しき初老の婦人と体格のよい秘書と三人で「インサイド・ジョブ」を観にきていました。これからの政策決定に少しは影響するのでしょうか。意外と長持ちしそうとも見られる菅政権ですが、自民が不信任提出に踏み切れば、あつという間に退場ということも十分にありそうな雲行きです。

